

論文の内容の要旨

論文題目 近代中国の「女権」概念 人権とジェンダー
The Concept of Women's Rights in Modern China : Human Rights and Gender

氏名 須藤 瑞代

中国は、清末から民国初期にかけて、膨大な量の新語を導入した。新語の登場が中国の思想状況にもたらした影響は、激烈なものであった。その中で、「(天賦)人権」「民権」「女権」は、中国の人権思想を構成する重要な概念となった。本稿では、これらのうち、中国の国家形成とジェンダーを考える上で最も注目すべき「女権」概念に焦点を当て、その変遷を考察する。取り上げる時期は、新語の登場による社会変化がもっとも激しく、「女権」概念をめぐる議論において、その後の中国、ひいては20世紀のフェミニズム全体にかかわる論点が矢継ぎ早に登場した1896年～1926年を中心とする。

「民権」についてはすでに先行研究がいくつかあるが、「女権」については、その思想史の変遷や「民権」「人権」との関連性についてはほとんど研究されていない。そこで本稿では、第一に、「女権」と「民権」「人権」との関連性に着目し、第二に、これら三つの概念全てを用いて女性を論じた梁啓超と、「女権」に批判的だった長女思順の思想に焦点を当て、第三に、「女権」の主体となる「女性」そのものの構築を、国際関係的視点から分析する。章ごとの内容は以下のとおりである。

第一章では、清末に積極的に纏足解放と女子教育を主張した梁啓超の主張を検討する。梁は、女性が男性に寄生せずに経済的独立を果たすことと、優れた子供を生み育てるという母としての役割の双方が重要で、それらを実現させるために女子教育が重要だと主

張した。当時梁啓超が多大な影響を受けていたのは進化論であり、そのため、未来志向が非常に強く、実際に目の前にいる女性たちよりもむしろ、未来に想定された中国の側に意識があった。

第二章では、梁啓超以外の男性による女性論を検討する。馬君武はミルとスペンサーの翻訳紹介により「女権」概念の普及に力を注ぎ、金天翮は『女界鐘』(1903年)で「国民の母」という理想像を提唱した。未来志向という点では、梁啓超から金天翮まですべて一致している。そして、未来の理想の女性像が描かれるのと同時に、過去の女性像も同時に形象された。それは、纏足女性に象徴されるものであった。

第三章では、女性自身による「女権」主張に焦点を当てる。女性論者はすべて現在女性が何をなすべきか、どのようにあるべきかを論じた。その答えとして、「男性化」(秋瑾)、「性役割からの脱却」(張竹君)、「国家の否定」(何震)の三つの主張が現れた。そして1911年の辛亥革命後、「女権」をめぐる議論は女性参政権の可否をめぐる議論に収斂していく。しかし、女性の役割は妻や母として家庭を守ることでありという主張が根強く、女性参政権獲得はならなかった。

第四章では、梁啓超とその長女・思順の父娘関係及び、それぞれの女性論を検討する。思順は、良妻賢母を主張し、一貫して家庭における女性の役割を重視した。一方梁啓超は、1922年に突如として「女権」を主張し始める。その背景には、士人運動から国民運動へという梁啓超の大きな思想的变化があった。

第五章では、国際関係を背景とした女性主体の形成について論じる。1920年代、女性も「人」であることを重視するのみならず、「母」であることをより重視する意見が出てくる。独身で母性から逃げてしまい己の快樂と幸福のみを追求する女性が出現したことを批判し、「母性」を重視する議論である。これによって、女性も「人」であるとしながらも、結局「母」役割が重要視されることになった。そして、「女」には「被抑圧者」という意味づけがなされる。抑圧からの解放をめざす新思想がこの時期大量に導入されていたのだが、それと同時に、「抑圧されている女性」そのものが形象され始めるのである。

近代中国の「女権」論と、ジェンダー概念とをつきあわせてみると、結論として以下の三つの点が指摘できる。

第一に、近代中国においては、従来のジェンダー概念によって想定されていたような、一国内の親族関係・経済関係・政治関係のみによってジェンダーが構築されたのではなかった。清末の「女権」論の中でたびたび指摘された中国女性の「弱さ」は、中国男性との比較によって認識されたものではなかった。国際関係の中で中国が弱国であったがために、民族/国家の国際関係上の強弱が女性に投影された。ゆえに、中国の富強という目的と、女性の強化の目的が一致した。これが、清末の女性論が男性主導と言っている形で行われた原因の一つを構成しているといえよう。近代中国のジェンダーは国際関係を投影されて形成されたのである。

そして、「女権」をどのように発現させるかをめぐって、「国民の母」、「男性化」、「性役割からの脱却」、「国家の否定」という四つの型がそれぞれ主張された。これら四つには、20世紀フェミニズムの代表的パターンが、萌芽的ではあるとはいえ、保守的なものから急進的なものまで全て見られる。それは、中国において、西洋の「文明的」国家体制と人権思想やそれに付随する女性解放論が、両方とも西洋諸国の富強の要因ととらえられ、この二つをいかにすり合わせるかをめぐって「女権」論争が起こったためであった。すなわち、西洋諸国の国家体制と西洋起源の人権思想の間にそもそも矛盾があり、それが辛亥革命前中国の「女権」概念をめぐる論争において表面化したと言えるのではないだろうか。

また、中国が「人権」「民権」「女権」の全てを体現する国だとする意見も出されていた。現在、アメリカから人権状況を批判されている中国が、近代において人権思想を体現する国と自らを位置づけていたことは注目に値する。このような主張をなしたのは、これら三つの概念が究極的には中国の富強を目標としており、共通の敵として中国の外部の列強が想定されていたためである。中国の「人権」「民権」「女権」概念は、列強に侵略される中国の人権要求であり、その中でさらに清朝による支配を受けている漢民族の人権要求であり、またさらにその中で男性による支配を受けている女性の人権要求を全て含んでいる。現在、人権一般については、植民地では人権が認められなかった、実はブルジョアジーの権利に過ぎない、「人」権は男性の権利に過ぎず、女性が入っていないという三つの点で批判がなされているが、これらは20世紀初めの中国においてすでに指摘されていたのである。

第二に、近代中国の女性論全般には、女性の「公」的活動(職業)と「私」的活動(母性)のあり方という軸があった。これらもまた、フェミニズムの重大な論点である。「女権」と、「良妻賢母」、そして1920年代に登場した「母権/母性」という三つの流れは、全てこの「公」と「私」のバランスを軸として論じられている。これを父娘で論じたのが、梁啓超と思順であった。

梁啓超の清末の議論では、夫に寄生せずに経済的独立を果たすという職業と、優れた子供を生き育てるという母としての役割の双方が重要で、それらを実現させるために女子教育が重要だとされていた。しかし、女性の家庭内での役割と、仕事の両立といった具体的問題点については等閑視されていた。1922年の「人権と女権」でも、「母」役割はまったく論じず、教育・職業・参政という家庭外に限定された女性論になっている。梁啓超の女性論で念頭に置かれている「女性」とは、「公」的存在としての女性であった。一方思順は、一貫して家族に対する妻として母としての女性の役割を非常に重視し、「私」的な女性の役割を根幹に据えて女性を論じている。参政権や職業など家庭外での女性の果たすべき役割に関しては、限定的な肯定にとどまっていた。

梁啓超と思順の女性論は、一見対立しているようだが、梁啓超が論じなかった「私」的側面を娘の思順が論じ、逆に娘が論じない「公」な側面を父が論じるという、相互補

完性があった。梁啓超と思順は、二人合わせてようやく「公」と「私」両方の女性を語ることができた。この相互補完性は、近代中国の女性論全体の特徴を体現していると考えられる。この「公」と「私」、具体的には職業か母性か、という命題は、民国期でも常に問題であり続けた。そしておそらくは現代においても最も大きな問題として存在している。彼らは、父娘二人合わせて、現代につながる問題を提起したと言えるのである。

第三に、1920年代には国家と女性とが分断され、「同じ女」という共通意識が国家意識より優越しかかった。清末では女子教育が進んでいるほど国家は強いという例として日本女性が挙げられていたのだが、1920年代になると、一転して日本女性は国内で抑圧されているとみなされ、同情される存在となった。中国と日本には儒教という社会的共通性はあったが、中国・日本の女性たちが「同じ女」の共通項に求めたのは、参政権が未獲得であるなど、欧米のフェミニズムの要求課題を、中国も日本も共に得ていないという点であった。ともに「抑圧されている」という認識の枠組みそのものの共通性が重要視されたのである。

近代中国では、フェミニズムは、女性への抑圧状態を認識させる思想として機能し、それを軸として、「同じ女」意識が国家意識よりも優越しかかった。しかし、それは結局、国民国家間の争いに中国が全面的に巻き込まれていくなかで、ストップモーションがかかった。以後、今日にいたるまで、「同じ女」意識の模索は数多くなされているが、ストップモーションはそのままかかり続けているように思われる。近代中国における「女権」概念の議論は、このような国民国家形成途上に表れた、多くの可能性を矢継ぎ早に展開する議論であり、現代の女性論にも極めて示唆に富むものであったと言えるだろう。